

朝日の昇る頃に

UCO

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深海棲艦を壊滅させた作戦から一年余り。潮たち第七駆逐隊は、駆逐棲姫が現れたという噂を耳にする。折しもその日は七駆の出撃日。天気は晴れ、波は穏やか、四人は何事も起こらないよう祈っていたが……。

pixivで投稿したものの転載です。

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=8028653

この物語は、すでに沈んだ艦娘が複数いる設定になっています。

苦手な方はご注意ください。

目次

本編	一	1
	二	7
	三	22
	四	32
	五	56
	六	62
後日談		
小さな秘密		67

本編

一

その戦いは熾烈極まりないものだった。

突如として海の底より現れた、人類に仇なすもの、深海棲艦。そしてそれに対抗する唯一の力を持った、鋼鉄の艦装を身にまとう少女たち——艦娘。

彼女たちの戦いはいつ果てるとも知れず、人々は長らく深海棲艦の脅威にさらされ続けた。

この状況を打破すべく、全軍を挙げての深海棲艦殲滅作戦が決行される。

大型艦娘を中核とした連合艦隊で敵主力部隊を討ち、残存兵力を支援艦隊と連携して殲滅を図る。かつてない大規模な作戦だった。

幾千幾万の砲弾が湯水のように撃ち放たれ、艦娘たちは傷つきながらも、勝利を信じてこの激しい砲火の中に身を投じていった。

ほぼ全艦娘を投入したこの作戦は、一応の成功を収め、深海棲艦を組織的な活動を行えないまでに壊滅させた。

しかし、その代償は決して小さくはなく、特に敵機動部隊による鎮守府強襲では大き

な犠牲を払う結果となった。

それから一年あまり。破壊された庁舎や工廠などの設備の再建も一通り終わり、ようやく鎮守府に平穏な日々が戻りつつあった。

日はまだ低く、空気は肌寒さを感じる時間。最盛期には百五十隻を超える艦娘を擁した鎮守府だが、今ではその頃の面影はなく、朝食時の広い食堂には空席が目立つ。

朝食をとる艦娘の多くは駆逐艦や軽巡洋艦で、大型艦が朝から大食い合戦に興じるといったこともない。すでに見慣れて久しい、静かな朝の風景だ。

そんな食堂の片隅のテーブルで、小さな噂が持ち上がっていた。

「ふひふふえいひひ？」

「漣、口に物入れたまましゃべらないで」

卵焼きを口いっぱい頬張りながら、すつとんきような声を出した漣に、すぐ隣に座る朧が眉をひそめる。

「んんっ……こりや失礼。んで？ イ級がなんだって？」

「イ級じゃないわ。駆逐棲姫、よ」

とぼけた調子の漣の言葉に、はす向かいから間髪入れずに訂正が入った。

「隼鷹さんの偵察機が、近海で駆逐棲姫らしき艦影を発見したっていう話」

箸を置いて、ついさつき話したことを説明しなおす朝潮に、漣は「ほうほう」とわざとらしくうなずいて見せた。

「でも隼鷹さんの話でしょ。酔っぱらってたんじやないのー?」

「見つけたのは隼鷹さんじゃなくて、隼鷹さんの艦載機よ」

「妖精さんも一緒になつて酒盛りしてたかもよ?」

一年前の戦い以降、強力な深海棲艦はその姿を潜め、大型艦や鬼クラス以上の艦の目撃情報は絶えていた。漣がにわかには信じられないのも無理はない。

そしてそれは臚も、向かいに座る潮も同じ気持ちだった。

「空から見ただけなんでしよう? 見間違いつてことも……」

「でも潜水艦の方たちも見たつて言つてました!」

ただの噂話と片付けようとする臚の言葉を大潮の大きな声が遮つた。これに続けて、荒潮が補足するように付け足した。

「潜航中のイムヤさんたちのそばをお、すうーつと、通つて行つたんですつてえ」

段違いに構えた両腕を、「すうーつと」に合わせて動かす。表情はにこにこ笑顔で、緊迫感は全くない。

「今度は下からか……真正面から見た人はいないの?」

臚の問いに朝潮は首を振る。

「いないみたいだけど、隼鷹さんの話もイムヤさんの話も艦の特徴が一致してるのよ。それになにより」

一旦間を置いた朝潮に、なにか嫌な気配を感じた朧たちの箸が止まった。

皆固唾を飲んで見守る中、朝潮はおもむろに続けた。

「この鎮守府に……ゆつくりとだけど、ここの鎮守府に向かってまっすぐ航行してるらしいの」

「ひっ……」

今まで黙って耳を傾けていた潮が、小さく悲鳴を上げた。

漣も箸を口につけた姿勢のまま固まっている。姫クラスかどうかはともかく、少なくとも人型の深海棲艦らしいものがこちらに向かっている。事実だとすれば不気味なところの上ない。

「せつ、攻めてきたり、するんでしょうか……」

「わからないわ。そもそも本当に鎮守府を目指しているのかもわからないし」

青ざめた顔で訊ねる潮に、朝潮が再び首を振った。

「ちよ、ちよつと待って。八駆のみんなはその話いつどこで聞いたの?」

朧がずつと疑問に思っていたことを口にした。ただの尾ひれがついた噂話なのか、隼鷹たちから直接聞いた話なのかで信頼度も変わってくる。

「わたしは昨日の演習の後に隼鷹さんから直接聞いたわ。一昨日発見したそうよ」

「大潮たちはそのすぐあとで朝潮姉さんから聞きました！」

「それでそのことを話しながら歩いてたらイムヤさんたちとすれ違ってえ、『わたしたちも見た』って言われたのよねえ」

どうやら尾ひれがつく前の話らしかった。ただの噂話だとは言えそうもない。

隼は口をつぐみ、漣も宙を見つめたまま動かない。

重い空気が立ち込める。そんななか、一人黙々と食事を続けていた満潮が、わざとらしく音を立てて箸を置いた。

「それほど気にすることないじゃない。駆逐棲姫っていったって、一隻だけ。一体なにができるっていうのよ」

そう言つて満潮はトレイをつかんで立ち上がる。

「そんなのにやられるほど、わたしたちは落ちぶれてはないわ」

こう付け加えて、すたすたと漣たちの脇を通つて行つてしまった。

「満潮の言うとおりね。いくら強力な深海棲艦でも、駆逐艦一隻迎撃するのはわけないわ」

「うふふふ、ちよおつと心配しすぎだったかしらねえ」

満潮の一言で暗い雰囲気は瞬時に払拭された。この話はおしまいとばかりに笑つて、

朝潮たちは先に食事を終えた満潮に遅れまいと、手早く朝食を片付け始めた。

「あたしたちも早く食べないと。ほら、潮もいつまでも固まってないで。今日は任務あるんだから」

「あ、は、はい……」

漣も視線を下ろし、まだ一つ残っていた卵焼きを箸でつかむ。そして、それを口に入れる直前、ぽつりとつぶやいた。

「ま、一隻であればいいんだけどね」

甘い卵焼きを咀嚼しながら顔を上げた漣に、朧たちの責めるような視線が一齐に注がれていた。

「だいたい漣はいつも一言余計なの」

「えー、でもホントのことっしょ」

提督執務室へと向かう廊下で、漣は臙にたしなめられた。反省の色を見せない漣に、臙はため息をつく。そんな二人を、後ろから潮がすこし困ったように笑って見ている。

「あっ」

角を曲がったところで、騒いでいる二人に先んじて潮が執務室の前で佇む艦娘の姿を見つけた。

白のセーラー服に身を包み、白くて長い髪の上に同じく白い帽子を被った駆逐艦。

「響ちゃん」

潮が手を振って呼ぶと、響——ヴェールヌイも三人に気づいて軽く手を挙げた。

「おはよう。今日はよろしく」

この日の臨時編成で、響が応援として臙たち第七駆逐隊に編入されていた。ほぼ毎日どこそで臨時の艦隊編成がなされており、特に駆逐艦は演習に遠征、警備にとあちこち回されている。これももう皆慣れたことだった。

朧と漣も扉の前で軽く挨拶を交わして、彼女らは一緒に執務室へと入った。

様々な家具や装飾品にあふれていた提督執務室も、かつての姿は失われ、今では机一台に本棚がいくつもあるだけの簡素なものになっていた。壁にかけられた真っ白な軍服と軍帽だけが、提督の部屋であることを主張しているが、その軍服は一度も袖を通されていなかった。

この部屋の中央、カーペットもない、ツヤのある板張りの床の上に、朧、漣、潮、そして響は横一列に並んだ。

「みなさん、おはようございます」

主なき机の前で待っていたのは、現在艦隊の総指揮を執っている巡洋艦、大淀。かつては艦隊運営のサポートを行っていたこともあり、提督不在の中で誰が決めるでもなく、自然と彼女が司令官の位置に収まっていた。そのまま正式に提督代理として艦隊の指揮を取り続け、今ではすっかり板についている。

「今日の第七駆逐隊は鎮守府近海の警備任務です。詳細は既に通知の通り、変更はありません。もし深海棲艦を発見した場合、戦闘を許可しますが、すこしでも危険と判断したら速やかに帰投してください。この判断は旗艦の朧さんに任せます」

「はー」

朧の威勢のいい声に、大淀は笑顔で応えた。

「それではみなさん、出撃してください」

鎮守府周辺の警備なんて、どの駆逐艦も数え切れないほど経験しているから、普段であれば臆たちはなんの疑問も持たずに出撃していたところだが、この日はすこしわけが違った。

三人は顔を見合わせ、動こうとしない。その様子を響も大淀も不思議そうに眺めている。

「どうかしましたか？」

「あ、あの、噂なんですけど」

大淀が訊ねると、臆が声を上げるのは同時だった。戸惑う臆に、大淀は続けるよう促す。

そこで臆はついさつき朝潮たち第八駆逐隊から聞いた話をした。

「それで、もしかしたらこの鎮守府に向かってきてるかもしれない……」

「そう、ですか」

臆たちの話を聞いた大淀は、特に驚いた様子もなく、口元に手を当てて、なにか考え事をしているようだった。

でもそれもほんの一瞬で、すぐに手を下ろして答えた。

「わたしも隼鷹さんたちから報告は受けてます。不確定な情報なので、下手に不安を煽

るべきではないと思ひ黙っていましたか」

当然といえば当然なのだが、大淀はすでに知っていた。

「口止めしていたわけでもないですし、もう知ってるなら隠す必要ありませんね。現在複数の偵察機で索敵中ですが、まだ発見に至ってません。ただ、他にも数人の方から報告を受けているので、見間違いである可能性は低そうです」

それから大淀は、もし遭遇しても無理に交戦する必要はないこと、危険を感じたら速やかに帰投することを念押しした。

「今のところ、報告では一隻だけのようですし、我が艦隊の練度を鑑みれば、大きな脅威だとは考えていません。みなさんは普段通り任務を遂行してください」

結局大淀も満潮と同じ意見で、大騒ぎするほどではないと考えているらしい。

彼女が言い終えるのと同じくして、執務室の扉が開かれた。

「大淀ー、ちよつと資材のことで相談したいんだけど」

みなが振り向くと、扉の隙間から工作艦明石の顔が覗いていた。

「ああ、ちよつと待って、今行くわ。そういうことなので、第七駆逐隊のみなさん、お気をつけて」

そう言い残して、大淀は部屋を出て行った。残された四人はめいめい顔を見合わせる。

「せいじやま、行きますか」

「だ、大丈夫かな……」

大淀の言葉にとりあえず納得していた隴と漣とは逆に、潮は心配そうな表情を浮かべている。

「あまり気にしすぎるのはよくないよ。わたしも今聞いて驚いたけど、それほど問題ではなさそうだし、今は任務が優先だ」

「響の言う通りだよ、潮。ほら、しゃんとして、行くよー」

潮はまだ困惑した顔をしていたが、隴と響に背中を押されて、否応なしに先頭に立つて部屋を出ることになった。

その様子を眺めていた漣も、すこし遅れて執務室を後にする。

——ここまでフラグ立てたら出会っちゃうよね。

漣は先を行く三人に聞こえないようにつぶやいてから、小走りでみなを追いかけて行った。

三時間後、第七駆逐隊は青い海原のど真ん中を進んでいた。旗艦の隴を先頭に、漣、潮と続き、殿に響がいる。

航海は極めて順調。この間、深海棲艦はイ級一隻とも遭遇していなかった。

「天気晴朗なりて、波低し。実に遠征日和ですな」

漣が鼻歌まじりにつぶやいた。彼女の言う通り、空は雲一つない快晴で、波も穏やか。視界は三百六十度、海と空、そして、それを隔てる水平線しかない。

「ピクニツクとか、したいですね」

「おお、いいねえ。間宮さんにお弁当作ってもらお。唐揚げ、フライドポテト、卵焼き」
「ハラショー。とてもいいと思う」

「三人ともまだ任務中ってわかってる?」

響まで加わって盛り上がり始める三人に、朧が釘をさす。まだ帰路どころか、往復地点にも着いていない。

「わかってるって。でもこう退屈だとき……あ……う?」

両手を挙げてあくびをするふりをする漣が、なにかに気付いたようにさつと手を下ろした。その視線は左手前方の彼方へ注がれている。

「漣ちゃん、どうかしたの?」

すぐに潮も漣の視線の先に顔を向けたが、潮の目にはただ青い海が見えるだけで、漣が何を見ているのかはわからなかった。

「漣、なに?」

朧も振り返って漣に尋ねるも、漣は「んーっ」と低い唸り声をあげながら、目を細め

てひたすら一点を注視している。

「さ、漣ちゃん……？」

潮が不安そうな声を出す。朧と響も、緊張した面持ちで漣を見ていた。

緊迫した空気の中、不意に漣が右手をまつすぐに伸ばして、なにかを指差した。三人の顔がすぐにそれを追って動いた。

息を飲む朧たち。しかし、漣の口から発せられたのは、彼女らの予想していたものとはまるで違った。

「偵察機」

「え？」

漣の人差し指の延長線。それは海の上ではなくて、わずかに上を向いて空に向かって伸びている。

水平線の上、薄い青の空に混じるごく小さな点が浮かんでいた。

「電探に感あり。味方の偵察機みたいだ」

念を押すように響が告げた。それを聞いて、ようやく朧と潮は胸をなでおろした。

「なんだ、もう驚かせないでよ」

朧は深いため息をつく。そんなつもりはなくても、今朝からずっと張っていた緊張の糸が一気に緩んだようだった。

「めんごめんご。でもほら、敵機だったりしたら大変だしねー。ちよびつと緊張感を演出してみました」

「まったく。わたしはてつきり……」

言いかけて、隴は口をつぐむ。せつかくなんでもなかったのに、余計な不安を煽ることはない。

偵察機は帰投するところらしく、第七駆逐隊とは逆向きに進んでいた。左前方にあった小さな点はいつの間にか真横に移動していて、それから間もなく、後方、水平線の方へと消えていった。

それを見送るように、漣は大きく手を振っていた。

「見えないでしょ」

「気分の問題よ」

そう言って笑う漣に、隴はすこしあきれたような笑みを浮かべた。

気を取り直して前に向き直る四人。波を蹴る彼女たちの目には、いつのまにわき立ったのか、空と海の境に立ち込める黒い雲が写っていた。

それから天気が急変するのに時間はかからなかった。さつきまでの晴天が嘘のように、空はまたたくまに黒雲に覆い尽くされ、陽の光を遮った。

風も立ち始め、波が高くなる。ぽつりぽつりと、雨粒が肌を打ち始めた。

「あーもう、予報じゃ雨降らないって言ってたじゃん！」

「予報は予報。予定じゃないからね」

雨脚は徐々に強くなつてきていて、風もかなり吹いてきた。身体は波に大きく揺さぶられる。

「ひゃあっ！」

大きく波を浴びせられ、潮が悲鳴をあげた。

「とんだピクニックだね」

一緒に波をかぶつた響がつぶやく。艦娘だから濡れるのには慣れているとはいえ、潜水艦でもなければ、いきなりびしょ濡れにされるのは気持ちのいいものではない。

「おやおやあ、潮さん。相変わらず立派なものをお持ちで」

振り返つた漣がにやにやしながら潮の胸元を見ている。

波で濡れたせいでセーラー服がびったりと張り付き、潮の駆逐艦らしからぬ豊かな部位が強調されていた。

「ひ、ひゃあーっ！」

自分のあられもない姿に気づいた潮が、再び悲鳴をあげた。顔を真っ赤にしながら手にした連装砲で必死に胸元を押さえている。

「漣、からかわないの。潮は大丈夫ー？」

「ひゃ、ひゃい……」

間も無く雨は急に激しさを増し、波をかぶらなくとも全員びしょ濡れになるはめになった。

ほんの十分ほど前までの穏やかな海は一変。ピクニック日和とは程遠い大荒れの天気になっていた。

雨雲もさらに厚みを増したのか、太陽がもう沈んでしまったと勘違いしそうになるくらい、あたりは暗い。

「これはひどい」

漣がそうつぶやいた直後、彼女の顔面で波が炸裂し、大量の潮水を口の中に入れるはめになった。

「ペーっ、ペっペっ！」

「さすがにこれはまずいな。どうする、作戦を中止するかい？」

最後尾の響が、漣の隣まで進み出て尋ねた。まだ持ちこたえられるレベルではあるものの、これ以上天候が悪化したらまともに航行するのは不可能になりかねない。

「漣？」

漣からはなんの返事もない。響は訝しんで顔を覗き込んだ。

熟考しているのだろうか、朧は真剣な面持ちで嵐の中を凝視している。とめどなく滴り落ちる雨粒が、心なしか汗のように見えた。

不意に朧は目元の水滴をぐつと拭い、そして言った。

「全員戦闘配置について！」

あまりに唐突な命令に、みな耳を疑った。まさかこの暴風雨と戦おうとでも言うのかと。

しかし、すぐに朧はその疑いを晴らすように告げた。

「一時の方向、敵艦見ゆ！」

激しくうねる波。その波間から、朧の示した方向に確かに黒い影が見えるのを、三人とも確認した。

暗く、雨と波が視界を遮るため、はつきりと姿形を捉えることはできない。ただ、それはイ級のような人ならざる姿ではないのは確かだった。

いつの間にか、空からはごろごろと雷の音が鳴り響いている。

敵艦らしき影との距離はどんどん詰まっていく。頭と身体、二本の腕があるのがすでに誰の目にも明らかだった。

空に稲妻が走る。激しい雷鳴とともに、あたりが一瞬照らされた。

「駆逐棲姫……！」

青白い肌に漆黒のセーラー服。ごく薄い色の髪はサイドテールにまとめられ、腰回りには艦娘のものとは似ても似つかない異形の艦装をまとっている。まぎれもなくそれは、駆逐艦に属する深海棲艦でありながら、人の形を持つ「姫」だった。

「キ、キターツ！」

今朝からさんざん立ててきたフラグを回収した興奮からか、漣が叫んだ。しかし、はしやぐ声とは裏腹に、その顔はやや引きつっている。

「浮かれてないで、警戒！」

天候がこうも荒れていなければ、もつと早くに気づくことができたはず。そうすればその時点で撤退するなり進路を変えるなりできただろうが、ここまで接近してしまつては簡単に逃げ出すわけにもいかなかった。

淡い光を灯した二つの瞳が第七駆逐隊に向けられている。相手もこちらに気づいていることは想像に難くない。

「砲撃戦用意！」

「戦うんですか！」

「もう気づかれています。それならせめて先手を！」

朧が連装砲を構える。漣と響も同じように構え、慌てて潮も続いた。

すこし遅れて、第七駆逐隊に呼応するように駆逐棲姫もゆつくりと左腕を上げた。そ

の腕の先には連装砲を備えている。

「撃ち方、始め！」

敵が砲撃動作に入ったため、もはや猶予はない。隴の号令とともに、第七駆逐隊は一齐に攻撃を開始した。

風雨はすこし和らいでいたものの、未だに波は高く、照準が定まらない。

しかしそれは相手も同じこと。着弾による水柱の間から、駆逐棲姫の攻撃が飛んだが、砲弾は隴たちをかすめることなく、はるか後方に別の水柱を立てた。

「てーっー！」

敵との距離はさらに詰まっていた。照準を修正し、水柱のあがる範囲が狭まっていた。そして、すれ違いざま、響が放った攻撃が駆逐棲姫に見事命中した。

敵の右肩あたりで炸裂した砲弾は、激しい轟音とともに火花を散らす。しかし、駆逐棲姫は表情一つ変えておらず、艦装にも傷がついたようには見えなかった。ただ肩にかかったサイドテールがわずかに焦げていた。

「この装甲の厚さ、間違いなく駆逐棲姫ね……雷撃用意！」

自分たちとそう変わらない体格ながら、駆逐艦娘とは桁違いの装甲を有するのが駆逐棲姫の特徴の一つ。駆逐艦の主砲でその戦艦並みの防御を貫くのは難しかった。

ただそれなら、戦艦の装甲をも打ち破る攻撃を加えればいいだけのこと。

隴たちはすぐに舵を切った。

駆逐棲姫はこのまま戦場を離脱しようとしているのか、第七駆逐隊の対して背を向けたままだった。

この機を逃す手はない。四人の魚雷発射管が敵艦へ向けられる。

「あれ?」

今まさに魚雷を発射しようという瞬間に、突然潮が首をかしげた。

「ん? どつたの?」

「あ、いや、なんだか変な感じが」

「へ?」

なにやら要領を得ない答えに、漣も首をかしげる。

「どうしたの二人とも、集中して!」

戦闘中にそろってぼかんとしている二人に、隴の叱咤が飛んだ。

「ご、ごめんなき、ひゃあつ!」

突如訪れた今までで一番大きな波に、潮が大きく体勢を崩した。

風雨が急に激しさを増していた。雷鳴が絶え間なく鳴り響き、雨が滝のように降り注ぐ。

「くっ……潮大丈夫!!」

うねり狂う波間をくぐり抜けて、朧が潮を抱きかかえた。

「な、なんとか……」

漣と響も遅れて集まってきた。

「さすがにもう追撃は無理だ」

もはや敵の姿を確認するのは困難だった。響の言葉に、朧は無言でうなずくと、任務中止を告げた。

「ああー、生き返るわあー」

お湯に肩までつかり、湯船の中で思いつきり足を延ばす。雨と海水で冷え切った身体が芯まで温められていくのを感じながら、漣は大きく息を吐いた。

「疲れました……」

「ほんとにね」

漣につられて潮と朧も息をつく。口には出さなかったが、響も小さくうなずいていた。

あれから嵐が止むのを待つて、第七駆逐隊は鎮守府に帰投した。

一時間もかからずに、あれほど荒れ狂っていた海は何事もなかったように鎮まり、見上げればただ太陽だけが浮かぶ空が広がっていた。

心身ともに疲れて帰ってきた四人は、大淀への報告もそこそこ、塩まみれの身体を引きずって、入渠ドックという名のお風呂に直行したのだった。

「にしても、どこ行ったんだろ」

湯船のふちに首を預けて、漣がぼつりとつぶやいた。

なにがと言わずとも、三人とも漣の言わんとするところはすぐにわかった。

嵐の中、背を向けて去っていった駆逐棲姫は、確かに鎮守府の方角へ向かっていた。だから帰り道、どこかでまた遭遇するのではないかと四人は気が気でなかった。

結局、駆逐棲姫の姿はどこにもなく、気がつけば鎮守府が見えていた。

「海の中、でしよ」

「深海」に「棲む」艦の名の通り、かの異形の艦たちは普段は海の底にいます。そして唐突に海面に現れ、侵攻してくるのだ。わざわざ浮上してくるのは、潜水艦型でもなければ、海中より海面に出た方がずっと速く航行できるからだろう。

だから、撃沈したのでもなく深海棲艦が消えたのであれば、それは海の底へ帰って行ったと考えるのが自然だった。

「まあ、そうなんだろうけど。出たり入ったり大変だねえ」

偵察機がなかなか発見できないのも、侵攻速度がゆっくりなもの、海の上と下を何度も行ったり来たりしているからだと思われた。

「ところで、あのとき潮はなにが気になっただんない？」

「ああ、なんか変な感じって言ってたっけ。なんだったのあれ？」

「え？ あ、えっと、その……」

唐突な響の問いかけに、潮は一瞬きよとんとしたが、すぐにさっきの戦闘のことを思

い出したようだ。

「えっと、わたしもよくわかんないんですけど、違和感が……例えばカレーライスを食べたら、カレー味のハヤシライスだった、みたいな……」

唐突に現れた謎の料理に、三人の頭上にはハテナマークが浮かぶ。

「ごめん潮、なに言ってるのかわかんない」

「ううう……」

うまく説明できずに落ち込む潮の顔がお湯に沈んでいき、ぶくぶくと泡を立てた。

「まあ、漣としてはですね、この」

いつの間にか潮の背後に回っていた漣はそう言うと、彼女の脇の下に両腕を勢い良く突っ込んだ。

「ひっ！」

「駆逐艦にあるまじき胸部装甲のほうが違う感がありますなー！」

威勢のいい声とともに、漣の開いた両手が潮の胸をむんずと掴み、思い切り揉みしだき始めた。

「ひゃああああーっ！」

「むむっ、またおつきくなつたんじゃないか?! 姉妹艦として、これは入念にチエツクしなければなりませんー！」

潮がもかくほど、漣は力を入れてしがみつき、離れようとしない。湯船からは激しい水しぶき上がり、水面が大きく波打つ。

「二人とも元気だね」

じやれ合う漣たちを眺めながら、響がつぶやいた。心なしか、口角が上がっていた。

一方の朧は、いつもなら助け舟になるところだが、そんな気力も残っていないのか、騒ぐ妹たちを一瞥しただけで、身体を湯船に深く沈めた。

「もうやめてえー!」

しばらくのあいだ、入渠ドック内には潮の悲鳴と漣の笑い声がこだましていた。

翌日、先日まではただのうわさ話だった駆逐棲姫の件は、第七駆逐隊の報告もあって、正式に大淀から各艦に到達されることとなった。

姫クラスの深海棲艦と久しく戦闘のない鎮守府はにわかに緊張感に包まれる——かと思われたが、わずか一隻、それも姫とはいえ駆逐艦ということもあって、昼頃にはほとんど話題にのぼることもなくなっていた。

一部を除いて。

「今どのへんにいるんかね」

部屋の窓から海を眺めていた漣が、誰に尋ねるでもなくつぶやいた。

艦娘たちの生活の場である艦娘寮。主に同型艦毎に部屋が割り当てられるが、特型駆逐艦のような姉妹の多い艦型には複数の部屋があてがわれる。部屋の内装や広さはいくつか種類があり、第七駆逐隊には畳敷きの四人部屋が割り当てられていた。

今日の第七駆逐隊は待機。非常時にはいつでも出撃できるようにしておく必要はあるが、鎮守府から遠く離れたりしなければ、基本的には自由時間だ。

自主トレする艦娘もいれば、おしゃべりやゲームに興じる者、ひたすらだらだらする者など、その過ごし方は様々。漣がすこし視線をずらせば、鎮守府内をランニングする長良型軽巡たちや、芝生に敷物を広げてお菓子を並べる睦月型駆逐艦たちの姿が目に入る。

「さあね。案外近くまできてたりしてね」

本気が冗談か、答える朧は連装砲を膝に抱えて、砲身を磨いていた。小さなちゃぶ台を挟んで、潮も自分の艤装の整備をしている。

装備のメンテナンスも艦娘の大事な仕事。大きく破損したり、どうやっても直せない故障があれば工廠へ持っていくが、通常の整備は各艦個人で行う。

漣も一緒に整備をしていたはずだが、いつの間にか手は止まり、窓枠に肘をつけて外を見ていた。

「まあ来ててもおかしくはないよね。むしろまつすぐ鎮守府に向かつてるのに、まだ来

てないっていうのがおかしい」

すでに発見から三日。航行速度が非常にゆっくりだとしても、昨日の時点で鎮守府から三時間ほどの距離にいたのだから、とつくに到着していても不思議ではない。

「近くに来てたとしても、一隻だけでそうそう攻めてはこないでしょ。そもそも目的が攻撃なのかもわかんないだし」

単なる偵察という可能性だってある。実際、鎮守府近海には、偵察らしき駆逐イ級の姿がたまに見られる。ただ、偵察を駆逐棲姫自ら行う理由を朧は見つけられていなかった。

もう一年も姿を現していなかった、ヒトの形をした深海棲艦。それが突如現れ、鎮守府へ向けて非常にゆっくりと近づいてきている。

それだけでも十分奇妙なのに、随伴艦を伴わずに単独行をしているのだから、不気味この上ない。だからこそ、ほとんどの艦娘はこの話を聞いてもいまいち現実味を感じていないのだ。

しかし、朧たちは違う。実際にその目で見て、砲火を交えた。それは紛れもなく現実だった。

「お、また偵察機」

プロペラの音を鳴らして、窓の外を彩雲が横切っていった。漣が窓の外を眺めだして

から十分ほどの間に、すでに三機の偵察機が飛んでいくのを見ていた。

「空母総出で偵察機飛ばしてるらしいよ。カタパルト持つてる巡洋艦も手伝ってるって」

隴がそう言う間にもプロペラの音が聞こえてくる。

「今朝艤装付けてる鳳翔さん久しぶりに見……潮?」

さつきからずつと黙り込んでいる妹の様子が変なことに気づいて、隴は声をかけた。魚雷発射管を持つ手はぴくりとも動かず、その目は焦点が合っていないようではんやりしている。

異変に気づいた漣も窓際から離れて手を伸ばすと、潮の顔の前で上下に振った。

「っー」

びくつと潮の肩が震えた。

「ぼーつとしてたけど、具合でも悪いの?」

「え、あ、いえ、そんなんじや」

きよとんとした顔で隴と漣の顔を交互に見た潮は、慌てて両手を顔の前で振った。

「ちよつと、考えごとを……」

そう言つて、潮はうつむく。明らかにおかしい様子に、隴と漣は顔を見合わせる。

「考えごとつて、昨日言つてたやつ?」

朧が尋ねると、潮は下を向いたまま小さく頷いた。

「昨日のつて、カレー味のハヤシライスの話？」

「そ、それはただの例えで……」

漣の微妙に的を外した問いに、困ったような笑みを浮かべる潮。ただ、昨日は深く突っ込まなかった朧も、その話は気になっていたらしく、漣の後を受けて聞いた。

「その例えつて、ニセモノっていう意味？」

「ニセモノ……とはすこし違つて、ホンモノなんだけど、その、ちよつと違うもの、というか……」

質問したはいいものの、やはりよくわからない答えに、二人は眉をハの字に曲げた。

潮もうまく答えられないことなもどかしいのか、そわそわと落ち着かない様子。

「つまり……」

「あ、あー！」

しばしの沈黙の後、口を開いた朧を遮るように潮が声をあげた。

「も、もう三時ですね。なにかおやつを買つてきますね！」

そう言うのと、魚雷発射管を脇に置き、立ち上がった。壁にかけられた時計の針は三時五分前を指していた。

「え、おやつならもう」

「いつてきまーすー！」

漣の制止も聞かず、潮はそそくさと部屋を出て行った。扉の閉じる音の後、ぱたぱたと廊下を駆けていく音が聞こえた。

「いつちやった」

右手にちやぶ台の下から取り出した間宮羊羹を握ったまま、漣がつぶやいた。じつと潮が消えていった扉を見つめている。

「すこし、気が動転してるのかも」

臈もまた、扉の方を見ながら心配そうに言った。

ここ二、三ヶ月の間、第七駆逐隊は敵艦との交戦機会がなかった。海に出ることはあっても、深海棲艦の数自体が激減していて、まず会敵することがない。それが急に駆逐棲姫という強敵と相まみえたことで混乱して、気持ちの整理がついていないのかもしれなかった。

「問い詰めたらかわいそうだし、潮が戻ってきても、もうこの話はやめよう。また話したくなったら話してくれるでしょ」

「ほーい。それはいいんだけど……」

と、漣は手にした羊羹をちやぶ台に乗せた。

「これどうしよつか」

今朝、食事の後に臙が三時のおやつにと買っておいたもの。ちやぶ台の下にあるお盆の上には、小皿とナイフ、楊枝も用意している。

「明日食べよつか」

ちよつと残念そうに笑つて、臙は答えた。

それからほどなくして潮は帰つてきた。間宮羊羹を大事そうに抱えて。

四

鎮守府中の偵察機をかき集めて行われた搜索だったが、結局駆逐棲姫の発見には至らなかった。警備に出た艦隊からも情報は得られず、駆逐棲姫がどの辺りまで迫ってきているのか全くわからないまま、鎮守府は夜の帳に包まれていった。

日が暮れば、艦娘たちも眠りにつく。彼女たちが寝起きする寮の明かりは落とされ、鎮守府は静まりかえっていた。

日付が変わってだいぶ時間がたった頃、布団の中で潮は目を覚ました。部屋の中は、時を刻む秒針の音と、潮と並んで眠る朧と漣の寝息だけが聞こえている。

寝ぼけ眼で暗い天井を見つめていた潮は、おもむろに上体を起こすと、窓の方に顔を向けた。

カーテンの隙間から月明かりが差し込み、窓際の床を明るく照らしている。その明かりを頼りに、潮はそのそと窓際に這い寄った。

顔が覗けるくらいに、ゆつくりとカーテンを開き、潮は外を見た。空にはまん丸の月が浮かび、鎮守府と海を煌々と照らしている。

潮は音を立てないように窓をすこしずつ動かして、開け放った。夜の冷たい風が部屋

に入ってくる。

じつと、海を見つめながら、潮は胸の前でぎゅっと手を握りしめた。

それから、意を決したように立ち上がると、寝間着を脱ぎ始めた。

「んん……潮？」

月明かりで目が覚めたのか、朧が半身を起こして、セーラー服に袖を通して潮に顔を向けた。

「ど、どうしたの？」

「んー……？」

朧が驚きの声を上げると、漣も目を覚ました。

潮は無言で着替えを終えると、扉に向かって歩き出した。

「ちよ、ちよつと待って！」

それを見た朧は布団を跳ね除け、飛び上がるように立ち上がった。つられて漣も起き上がる。

その間にも潮は靴を履き終え、今まさに部屋を出て行くとしていた。朧たちは大慌てで寝間着を脱ぎ捨て、スカートを履き、セーラー服を被りながら扉へ向かう。

振り向くこともなく潮は部屋を出て行き、すぐに朧と漣もその後を追った。

薄暗い廊下を、やや早足で潮が歩いていく。彼女に遅れまいと、朧たちも小走りで距

離を詰めていく。

「どこ行くつもり？」

横に並んだ臙が、声を潜めて尋ねるも、答えはない。ただ、潮の目はまっすぐと暗闇の先を見据えていて、目的をなく彷徨っているわけではないようだ。

足元がほとんど見えない中階段を下りて、さらに歩いて行くと、やがて廊下の先に微かな光が見えてきた。

「宿直室？」

不測の事態に備えて、夜間当直の艦娘が待機している部屋。その扉の隙間からわずかに光が漏れている。

潮は明るく縁取られた扉の前で立ち止まると、右手を上げて小さくノックした。

ほんのすこしの間を置いて扉は開かれた。急に溢れ出した光に、三人は目を細める。

「どうされました？」

扉を開けたのは当直の軽巡、神通。まだ明かりに目が慣れていない三人からは顔がよく見えないが、その声色から真夜中の来訪者に驚いているのがわかる。

「あの……艦装の使用許可を、いただきたくて……」

潮の口から出た言葉に、臙と漣は目を丸くした。

艦娘が海上行動を行うのに必要な艦装一式は、普段は保管庫に格納されており、通常、

持ち出しには司令官の許可が必要となる。そして、夜間は当直艦が司令官の職務を代行するので、艀装使用も当直艦が認めれば許される。

「どういふことでしょうか？ なぜこんな夜中に」

神通の疑問も当然だった。夜間でも敵襲があれば出撃することはあるが、そのときはまず当直の艦娘が対応する。ましてや攻撃を受けているわけでもないのに、夜中に理由もなく艀装の持ち出しが許されるはずがない。

「なになに、どうしたの？」

もう一人の当直艦の夕張が、神通の肩越しに顔をのぞかせた。潮たちの姿を見て、すぐに驚いた表情を浮かべる。

「それが、艀装の使用許可が欲しいらしくて……」

「へ？」

夕張の顔がますます驚きの色に染まる。

「どういふことよ」

「わたしも今聞いたばかりなので」

軽巡二人が問答する中、下を向いていた潮が絞り出すように言った。

「胸騒ぎが……あの胸騒ぎがするんです。ずっと胸がドキドキしてて、暗闇の中から誰かに呼ばれているようで……」

震える声。肩も微かに震えている。

今にも泣き出しそうな潮の様子に、その場にいる四人は息を飲んだ。

「だから……！」

潮はきつと顔を上げ、神通の目をしっかりと見つめて告げた。

「確かめないと。海に出て、確かめないといけないんです」

決して大きくはないが、力強い声だった。

「それって……」

同時につぶやいた朧と漣が顔を見合わせる。二人とも同じことが頭をよぎったのだらう、それ以上はなにも言わなかった。

潮はただじつとして神通の返事を待っていた。

神通は困ったように手をほおに当て、答えを決めかねている。一方の夕張は面倒ごとに関わりたくないのか、じりじりと神通の影に隠れるように移動していた。

そのまま沈黙が続くかと思われたそのとき、

「いいじゃん！」

突然、張りのある声がある声の静寂を切り裂いた。

みな一斉に声がした方を向くと、

「姉さん！」

そこにあつたのは、暗闇の中、宿直室から漏れるわずかな光に照らされた、川内型一番艦、川内の姿だった。

「夜戦、行こうよ！」

川内は隴たちの後ろに立つと、子供のように目を輝かせて言った。夜であることなどおかまいなしに大きな声で。

「姉さんまで、なんでここに」

駆逐艦三人に加えて騒がしい姉まで加わり、神通は肩を落とす。

「いやー、この子らの夜戦したい気持ちだが、わたしの夜戦センサーに反応したのかな、目が覚めちゃって」

「わたしは別に夜戦がしたいわけじゃ……」

訂正しようとする潮の言葉など意に介さず、川内は続ける。

「なんならわたしが旗艦で引率してもいいよ。神通は残ってて」

潮たちを押しつけて神通の前まで進み出る。そんな姉に、神通はため息をつくど、告げた。

「わかりました。艦装の使用許可を出します」

「あ、ありがとうございます！」

「やったー！」

頭を下げる潮と、両手を挙げて歓喜する川内。

「ただし」

今にも飛び出していきそうな川内を制するように、神通がぴしやりと言った。

「わたしが付き添います。姉さんは部屋に戻ってください」

「えええー！」

喜び勇んだのもつかの間、川内は不満気に口を尖らせる。

「なんでなんでー、神通だけずるいー」

「部屋に戻ってください」

甘い声で駄々をこねる川内に、神通はもう一度、静かに告げた。

「ずる——はい……」

笑うでもなく怒りをあらわにするでもない、真顔の妹に何かを感じ取ったのか、川内は急に大人しくなり、目を逸らしながら後ずさった。

「夕張さん、すこし出てきますので、留守番よろしくお願いします」

「はいはい。いってらっしゃーい」

いつの間にか部屋の奥に引っ込んでいた夕張が、手にしたマグカップを掲げて小さく揺らした。

「では行きましょう」

「は、はい！」

神通は扉を閉めると、明かりのなくなつた廊下を臆することなく歩き出す。

遅れじと神通に続いた潮は、数歩進んだところでふと歩みを止め、小走りで引き返した。

「二人も、一緒に来て」

扉の前で呆然と立ち尽くしていた朧と漣の手を取り、潮は言った。そして返事を待たずにそのまま二人の手を引いて再び歩き出す。

その場には、「わたしは？」とでも言いたげに、自分の顔を指差す川内だけが一人残されていた。

昼間整備したばかりの連装砲と魚雷を身につけ、潮たちは海に出た。

先頭は言い出しつぺの潮。その航跡をなぞるように、朧、漣、そして神通が続く。

四人は一言も発せず、黙々と夜の海を進んでいた。ただ首をせわしなく左右に動かし、周囲を警戒している。

潮だけは視線を前に向けたまま。本当になにかに呼ばれているかのように、その航路は迷いなく直線を描いていた。

海に出てからまだ一時間も経っていなかった。風は弱く、波も穏やか。黒々した水面

に月明かりが揺れるなか、
“それ”は突如四人の前に姿を現した。

「いましたー！」

先頭を行く潮が大きな声を上げた。なにがとは言わずとも、臃たちにはそれがなんなのかすぐに伝わった。

まだだいぶ距離はあるが、月明かりに照らされてその輪郭はくつきりと浮かび上がっている。

「駆逐棲姫、やつぱりこんな近くまできてたんだ」

一昨日、嵐の中で対峙した敵と同じ姿を確かめるように、臃がつぶやいた。

「潮ちゃん、わたしが指揮をとります」

神通はそう言いながら潮の前に進みでた。敵が現れたとなれば、指揮権は当直の神通にある。

「緊急事態です。夕張さんに連絡して、大淀さんにも伝えてもらいましょう」

これがイロハ級の駆逐艦や軽巡洋艦だったなら、その場で速やかに撃沈するだろうが、相手は姫クラス。しかも鎮守府は目と鼻の先。万が一討ち漏らして鎮守府に攻め込まれたらただではすまない。

「待ってください。すこしだけ、時間をください」

電信を打とうとする神通の腕をとり、潮が言った。

「ですが……」

「すこしだけでいいんです、お願いします」

神通の返事を聞かずに、潮は一人急加速した。もちろん、駆逐棲姫へ向かって。

「ちよつと潮!?」

朧と漣が叫び、急ぎ後を追ったが、潮は出力全開で波の上を進んでいき、みるみる駆逐棲姫との距離を詰めて行く。

はつきりその姿が確認できる距離まで近づいたところで、駆逐棲姫の主砲が火を噴いた。轟音とともに潮の後方で水煙が上がる。

潮は敵の照準がら逃れるよう舵を切った。敵の砲撃はさらに続き、思うように距離を詰められない。

「潮、攻撃しないの!?」

連装砲を構えながら一向に攻撃するそぶりを見せない潮に、しびれを切らした朧たちが砲撃を開始した。

駆逐棲姫の周囲に水柱が現れる。だがその照準は依然、潮を向いていた。まだ距離のある朧たちより、着実に接近しつつある潮の方を警戒しているようだった。

しかし、砲撃を受けて一瞬駆逐棲姫の注意が潮から逸れた。その瞬間を潮は見逃さず、一気に接近する。

もうお互いの表情が見えるくらいまで近づいていた。それに気づいた駆逐棲姫はすぐさま砲撃を再開しようとしたが、機先を制して潮が左腕の機銃を発射した。

無数の弾丸が駆逐棲姫の艦装に当たって、甲高い音を鳴らしながら火花が散る。一応防御の態勢をとっているが、機銃掃射くらいではその分厚い装甲に傷がつくわけもない。

潮は敵の周囲をぐるりと回るように旋回しながら、機銃を撃ち続けた。業を煮やした駆逐棲姫は、機銃弾など無視するように再び攻撃態勢をとった。

数発の砲弾が潮めがけて降ってくる。そのほとんどは標的ら大きく外れてただ海面を揺らすだけだったが、一発の砲弾が潮の右前方に着弾した。

「うっ……」

至近弾の衝撃を受けて潮は大きくよろけた。なんとかバランスをとって、転倒を免れたが、

「潮避けて!」

漣の叫びが潮に届く間も無く、激しい爆発音と水煙が潮を包み込んだ。

さきほどとは比較にならない衝撃に、潮の艦装から火の手が上がる。

「潮、大丈夫?」

駆逐棲姫を牽制しつつ、近づいてきた朧と漣が口々に言った。

幸いダメージは大きくなく、航行にも支障がないようで、潮は無言でうなずいた。制服の左袖がわずかに焦げていた。

「いったん離れよう。神通さんは……」

そう言つて臙が潮の手を取つた、その瞬間、再び砲撃音が鳴り響いた。

潮たちは一瞬身構えたが、杞憂に終わった。

空気を震わす轟音とともに、駆逐棲姫から爆炎が上がり、海面が赤々と照らされる。慌てて三人が振り返ると、そこには主砲を構える神通の姿があつた。

夾叉もなく、一発で主砲弾を直撃させた神通。三人があんぐり口を開けている間にも砲撃の手を休めない。

ゆっくり直進していた駆逐棲姫も危機を感じたのか、速度を上げて回避する動きを見せる。しかし神通の一発がかなり効いたのか、その動きはやや鈍い。数発の至近弾の後、再び神通の攻撃が駆逐棲姫に直撃した。

「さ、さすが神通さん……」

神通の戦闘能力の高さは周知の事実とはいえ、普段のおっとりした雰囲気からは考えられないほどの激しい攻撃に、漣が頬をひくひくさせながら笑つた。

「大丈夫ですか」

駆逐棲姫が距離を取つたのを見て、神通は潮たちのそばまでやつてきた。

「潮ちゃん、まだ時間が必要でしょうか」

神通は眉間にしわを寄せる。責任者として、これ以上傍観してはいられないのだから。

「潮ちゃん？」

「潮？」

神通の言葉を聞いているのか聞いていないかの、潮は思いつめたような顔で駆逐棲姫を見つめていた。破れたスカートを握る手がすこし震えている。

駆逐棲姫は神通の攻撃でかなりダメージを受けたらしく、沈んでこそいないが、攻撃はできないようだった。煙を上げる右腕を抑えながら、かろうじて航行していた。もう潮たちには目もくれず、いまだその航路は鎮守府へと向けられている。

潮はそんな駆逐棲姫から目をそらさずに、静かに口を開いた。

「ずっと、考えていたんです。一昨日あの子に会ってから感じていた、違和感というか、疑問というか……それがなんなのか、やっとわかりました」

朧と漣は息を呑んだ。黙って潮の言葉の続きを待つ。

「あの子は駆逐棲姫じゃありません」

「え？」

潮の言葉に三人ともが聞き返した。

「昨日は波が荒れていてよくわかりませんでしたけど、今日一目見て気がつきました」
隴たちは「駆逐棲姫」に目を向ける。しかし潮が一目で気がついた違いがわからない隴は尋ねた。

「なにが違うの？」

漣も神通もわからないらしく、揃って潮の顔を見る。一息置いて、潮は迷いなく言った。

「駆逐棲姫に、脚はないんです」

潮がそう答えた瞬間、再び三人の顔は損傷した艦装を引きずるように進む深海棲艦に向けられた。

傷ついてはいるが、確かにそれは四肢を持ち、二本の脚で海面に浮かんでいるのが見える。

「そうだったっけ？ あんまり覚えてないな」

脚があるのは確認しても、駆逐棲姫を最後に見たのはすくなくとも一年以上前。それも戦闘中にゆっくりと眺める機会などないのだから、漣が覚えてなくても仕方がない。

「つて、それを確かめたかっただけ!?」

たとえばあれが駆逐棲姫でなくても、姫クラス以上の深海棲艦であることは疑いようがない。それが駆逐棲姫だろうと、駆逐水鬼だろうと脅威であることには違いなかった。

漣の問いに潮は首を小さく横に振った。

「いいえ、それはそんなに重要なことじゃありません」

「それじゃあなんなの。潮はなにがわかったっていうの？」

答えを急かすように朧が言う。

「それは……」

潮の目線が黒い水面に落ちた。腕を回して固く自分の身体を抱きしめる。表情は暗く、今にも泣き出しそうだった。

「潮？」

朧がそつと潮の背に手を当てた。

潮は大きく息を吐くと、口を震わせながら、絞り出すような声で言った。

「あの子は……曙ちゃんです」

潮の口から出たのは、第七駆逐隊の仲間で、潮たちの姉妹艦でもある艦娘の名前。

その瞬間まるで時が止まったかのようだった。みな身じろぎひとつせず、揺れる波だけが、時が変わらず流れていることを教えていた。

計ったように、全く同時に口を開いた朧と漣が発したのは「は？」という一言だった。

「な、なに言ってるの潮。あれは深海棲艦でしょ。それに曙は……」

悪い冗談だとばかりに笑おうとする朧だったが、うまく笑えずに顔が歪む。

「曙はいないでしょ……」

諭すようにゆつくりと隴は言った。

彼女たちの仲間だった曙はいない。当然そのことは潮も認めているはずだった。しかし、潮は譲らなかつた。

「あれは曙ちゃんです。確かに、曙ちゃんなんです」

「ふざけないで！」

突然隴が声を荒げた。漣の身体がびくつと跳ねる。

「曙は沈んだの。一年前の戦いで、沈んだの！」

隴は声を張り上げた。その目は潮の顔を見てはいなかつた。

一年前、深海棲艦の機動部隊が鎮守府沖合に突如出現した。戦艦などの大型艦の多くが作戦行動中で、不在だったところを狙った強襲だった。戦艦などの大型艦の多く

当然、水雷戦隊をメインに迎撃部隊が出されたが、鎮守府は大編成の敵航空隊による爆撃を受け、大きなダメージを受けることになる。

この戦いで、第七駆逐隊も迎撃部隊として出撃し、そして仲間を一人失うことになった。

「……わたしが感じた違和感は、髪型でした」

怒りか悲しみか、今にも泣き出しそうな隴を一瞥して、潮は語り出した。

「昔見た駆逐棲姫はサイドテール。そして一昨日出会って、今あそこにいる子もサイドテール。だからみんな駆逐棲姫と信じて疑いませんでした」

なにも言わない朧の代わりに、漣はうんうんと首を縦に振った。

でも、と潮は続ける。

「逆なんです。駆逐棲姫のサイドテールは左側。あの子のは右側。曙ちゃんと同じ、右側です」

「えっ」

再びみな注目が潮から深海棲艦に移った。下を向いていた朧も顔を上げた。

「でも、でもそれだけで……!」

「たしかに、髪型なんていくらでも変えられます。だから、わたし確かめたくつてあの子に近づいたんです。そして、見つけました。サイドテールの根元の部分。黒い花飾りに結わえられた……」

潮は自分の左手を見つめ、言った。

「指輪を」

そして、開いていた左手をぎゅつと握りしめる。その薬指にはわずかな光を浴びてきらく、白銀の指輪があつた。

かつて、練度が極まった艦娘に対し、提督から特別に与えられた指輪。

艦娘の潜在能力を引き出し、より高い能力を発揮できるようにするという不思議な指輪だった。

一体どういう原理なのか、なにで出来ているのか、誰にもわからなかったが、ある者は頬を赤らめ、ある者は戸惑い、ある者は声を荒げながらも、差し出された艦娘たちはみなそれを受け取った。

まるでプロポーズみたい——誰とはなしにそんな冗談をささやき合ううちに、いつしかその指輪は「ケツコン指輪」と呼ばれるようになっていた。

「曙ちゃんは、指輪を髪飾りにつけていたんですか？」

朧と漣が絶句するなか、神通が自分の左手と深海棲艦とを見比べながら尋ねた。

「はい。指にはめるのを恥ずかしがって……」

指輪は大体薬指のサイズで作られていたため、ケツコン指輪という呼び名も相まって左手薬指に付ける艦娘が多かったが、艦娘によってはポケットに忍ばせたり、ネックレスにしたりするものもいた。

そして、第七駆逐隊で一番最初に指輪をもらった曙は、三人の羨望の眼差しの中で、「みんなの絶対付けない」と悪態をつきながら花飾りにくくりつけたのだ。

それ以来ずっと、曙の髪の上で指輪は輝いていた。

「肌の色も髪の色も、艦装も、全然変わってしまったけれど、指輪だけは……提督との大

切な絆だけは変わってない……あれは、曙ちゃんです!」

「うそ……うそだよ……そんな」

顔を歪ませて、朧はつぶやく。信じられないというより、信じたくないという風に。

「あのさ」

漣がらしくなくおずおずと右手を挙げながら言った。

「今更言うのもあれなんだけど、ほんとはさ、漣もなんとなくだけどさ、そうかもしれないなって、思ってた……」

「漣ちゃんも?」

潮は目を大きくして聞き返す。

「うん。はつきりとはないんだけど、漠然と。でも、そんなわけないじゃんって、思ってた。けど、潮の話聞いて、やっぱりそうだったんだって……だって、雰囲気似てるんだもん。髪型もだけど、ピリピリしてる感じとかさ。深海棲艦だからって言われたらそれまでだけど」

今までにずっと溜め込んでいたのか、漣は堰を切ったように言葉を並び立てた。

「いつだったか、噂があったっしょ。艦娘が沈んだら、深海棲艦になるっていう。それ思っ
い出してさ」

それは、まだ深海棲艦との戦いが小型艦の小競り合い程度だった頃、駆逐艦の間で広

まった噂だった。誰が言い始めたのか、初めはちよつとした怪談話だったものが、いつしかまことしやかに語られるようになり、駆逐艦娘たちを震え上がらせた。

なかには恐怖のあまり出撃拒否する艦まで出る始末。最終的に提督が駆けずり回り、落ち込む子達を必死になだめることでなんとか収束をみた。以後、この話はタブー扱いされ、話題に上ることはなくなっていた。

「でもまさか本当だなんて思わないじゃない。しかももう一年近く経ってるのに」「もうやめて!」

漣の言葉に覆いかぶさるように朧が叫んだ。

「わかったから……もう、いいから」

「朧ちゃん……」

「昨日、嵐の中であの子と目が合ったの。普通なら、むき出しの敵意を感じるはずなのに、あの子からはそういうのじゃない、ただちよつと怒ってるような、そんな雰囲気……感じたの。それがなんでなのか、どういうことなのかわからなかった」

一旦言葉を切った朧は「ううん」と首を振って続けた。

「本当はわかつてたのかも。心の奥ではわかつてたけど、漣と同じで、そんなことあるわけないって、信じられないって、頭で必死に押さえつけてたのかも。さつき潮が駆逐棲姫じゃないって言ったとき、怖かった。潮がなにを言いたいのか、きつとわかつてたか

ら。聞きたくなくて、でも聞かないやいけなくって、潮の次の言葉が怖くて、あたし……」

饒舌に語っていた朧の口が止まった。その両目から一つと一筋、涙がこぼれた。

「ごめんね」

そう言つて、今度は潮が朧の肩を抱いた。

潮はなにも悪くない、と目頭を押さえながら朧は首を振る。

「潮が気づいてくれて、よかつたつて思う。本当に、よかつたつて……」

朧は鼻をすすつた。それから涙をぐいっとふき取ると、潮に向き直つて尋ねた。

「それで、どうするの?」

「……曙ちゃんは多分、提督に会いたいんだと思うんです」

「提督に……」

朧は困つたように繰り返す。漣も驚愕と困惑が混ざつたような微妙な表情を浮かべる。

「わたしたちが邪魔をしたから、怒つて攻撃してきましたけど、きつと敵意はないと思うんです」

姿こそ深海棲艦だけれど、あれは曙ちゃんだから。潮の言葉に根拠はなかったが、朧も漣も無言でうなずいた。あとは、

「神通さん。曙ちゃんを、連れて行かせてください。提督のところへ」

今日何度目の懇願か、潮は神通に向かつて頭を下げた。ただこのときは一人じゃなかった。朧と漣も並んで、一緒に頭を下げていた。

大きなため息の後に、神通ははつきりと答えた。

「ダメです」

「そんな——」

しかし、がばつと顔を上げた三人が見たのは、さきほどの砲撃戦のときとは打って変わった、神通の優しい微笑みだった。

「なんて、ここまで聞いておいて言えるわけないじゃないですか」

神通の思わぬフエイントに、三人はほつと肩を撫で下ろして、笑った。

「ありがとうございます！」

三人は再度頭を下げた。今度は感謝の意を込めて。

「ただし、もしなにかあったときは、撃ちます」

今度は真剣な面持ちで神通は告げた。

「……はい」

潮がうなずくと、神通も小さくうなずいて、また笑顔を浮かべた。

「では、行きましようか」

「はー！」

波が揺れて潮が動き出す。その目指す先は深海棲艦——駆逐艦曙。まだ距離は近く、すぐに追いつける。

気が急つて速度を上げすぎた潮は、曙を追い越しつつも、急いで転回してなんとかその側まで近づいた。

もう潮は砲は構えていない。潮に敵意がないことを感じたのか、曙も戦闘態勢をとる様子はなかった。

「曙ちゃん。曙ちゃんだよね？」

速度を合わせて横にびったりと並んで、躊躇することなく潮は曙の顔を覗き込んだ。

見開かれた紫色の瞳が、潮を見つめ返す。

「ウ……」

曙がなにか口にしたようだったが、風の音にさらわれて、潮の耳には届かなかった。しかし、潮は迷うことなく曙の右手を取った。

「あたしたちが引つ張つてあげる」

後から追いついてきた朧も左手を取る。

「漣は押したげる！」

背後からは漣が両手を添えた。

きよろきよると首を回して、明らかに戸惑っている曙。そんな曙に、潮は優しい声で言った。

「一緒に行こう、提督のところへ」

五

三人がかりで引つ張つていったものの、鎮守府が見えてくる頃には、明るく輝いていた月は山の際に隠れてしまつていた。水平線の彼方から、すこしずつ紫がかつた空が上つてきている。

曙は一言も発することなく、素直に三人に支えられながら海を進んだ。いつしか緊張は解け、きつい表情も緩んでいたが、棧橋に上がるときにはやや強張つていた。

「曙ちゃん、大丈夫？ 歩ける？」

曙を棧橋に引つ張り上げてから、潮が尋ねる。

「ン……」

曙がこくりとうなずいたのを見て、潮は嬉しそうに微笑んだ。

艀装はだいぶダメージを受けていたものの、身体自体には目立つた傷はなく、曙はしっかりとした足取りでコンクリートを踏みしめた。

「ア……」

曙の手を引いて潮は歩き出した。

海上では先頭にいた神通は最後尾に回り、五人はぞろぞろと人気のない鎮守府内を行

く。

庁舎には入らない。艦娘寮の横を抜けて、さらに奥、木々が生い茂るなかに小さな石階段がある。

鎮守府の裏手にある高台に登るための石階段。艦装をつけたままだと一人分ぎりぎりの幅しかない。

「暗いから気をつけて」

昼間ですら陽が差さずに薄暗い場所。足元が全く見えず、知らなければそこに石段があることすらわからないくらいに真つ暗だ。

「ちよつと待ってください」

暗闇の中を登ろうとする潮たちを呼び止めた神通が、なにやら腿のあたりをこそこそと探っている。

不意に神通が強烈な光を放ち出した。

「わっ」

まぶしさに潮たちは目を背ける。直視すれば目がつぶれてしまいそうなほどの光は、神通の左脚の付け根辺りから出ていた。

「探照灯の使い方ではないと思いますけど」

そう言って神通は腿に備えられた探照灯の角度を、なるべく足元だけを照らすよう

に、下に向けた。

「神通さん、ありがとうございます」

昼間のように明るくなった階段を、潮たちは登り始めた。

途中で九十度折れ曲がり、さらに登る。階段は急で、艤装をつけた状態では艦娘でもなかなか辛い。

しかし、曙は顔色ひとつ変えずに黙々と石段を踏んでいた。

一番上まで登ると、急に視界が開くなった。海の方に向かって拓けたその場所からは、鎮守府構内が見渡せ、頭上には紫色の空が広がっている。

「曙ちゃん」

息を整えてから、再び潮は曙の手を引いた。

そう広くはない高台の端、きれいに丸く草木が刈り取られているところで、潮は振り返った。

「提督だよ」

そう言っ指し示したのは、潮の膝の高さくらいの四角い石だった。その前には花瓶が置かれ、すこし萎れた花が差してあった。

「本当は別の場所にちゃんとしたお墓があるらしいんだけど、提督に見守ってもらえるようにって、みんなでここに作ったの」

曙はその小さな暮石の前に進み出て、しゃがんだ。そして、右手を伸ばして暮石の表面を指でなぞった。もう探照灯は消されていて見えないが、そこには提督の名と、あの最後の戦いの日——曙が沈んだ日と同じ日付が刻まれている。

「……………ソ……………ク……………」

何度か指を往復させた曙がなにかをつぶやくと、急に震え出した。

「ク……………ツ」

潮がかたわらにしゃがんで、肩を抱いた。

曙は大粒の涙をぼろぼろこぼして泣いていた。しゃくりあげる音が周囲に響いていた。

「ごめんね、曙ちゃんも、提督のことも、守れなくって。曙ちゃん、最期まで提督のこと心配してたのに、ごめんね……………」

言っても仕方のないことだし、当然潮のせいでもなかったが、潮は何度も「ごめんね」を繰り返す。その瞳からは涙がとめどなく溢れていた。

「クソテイトク——！」

曙が空を仰いで叫んだ。かつてことあるごとに口にしていた言葉を。

それは心の底からの罵倒と、正反対の感情とを込めた呼び声だった。

東の空が赤く色づいてきていた。

昇り始めた太陽の光が、徐々に海と鎮守府を明るく照らしていく。

おもむろに曙が立ち上がり、朝日をじつと見つめた。曙に寄り添っていた三人も、引つ張られるように立ち上がって、赤くなっているその目を細めた。

次の瞬間、曙の身体は柔らかい光に包まれた。瞬く間に、漆黒の艤装が光となって蒸発するように消えていく。

そして、次第に曙自身の身体も光の粒になって、すこしずつ朝焼けの空へと昇っていく。

なにが起ころうとしているのか、すぐに理解した姉妹三人は思い切り曙を抱きしめた。もうどこにも行かせはしないとばかりに。

しかし、太陽が水平線からその姿を見せるにつれ、曙の身体から立ち上る光は増えていく。

両腕が消え、両脚も光となった。曙のいる場所はどんどん小さくなっていった。

枯れ果てたと思われた涙が、三人の目からこぼれ出す。抱きしめていたはずの身体は消えてなくなり、最後に残った花飾りもぱらぱらと崩れて消え去った。

唯一消えることのなかったもの——銀色の指輪が、朝日を浴びてきらきらと輝きながら落ちて、暮石に当たって跳ねた。

その小さな指輪だけを残して、まるで幻のように、曙は跡形もなく消えていなくなつてしまった。

しかし、曙が完全に消え去る直前、彼女が言った言葉が、三人ははつきりと聞こえていた。

「ありがとう」

と――。

六

「結局、なんだったのかね」

竹ボウキをぶんぶんと振り回しながら漣が言った。

「ちよつとやめてよ、散つちやうでしよ……深海棲艦は沈んだ船の怨念が形になったものだって説があるって、神通さん言ってたけど」

漣のせいで散ってしまった落ち葉を、朧が手にしたホウキで素早くかき集める。

「怨念がおんねん」

「……曙はずつと提督のこと気にしてたし、心残りだったんでしよ。怨念じゃないけれど、強い後悔の念つてところは同じだし」

「スルー？」

あのあと三人は寮に戻って一眠りした後、神通とともに大淀のところへ赴き、こつぴどく叱られた。

そして罰として命じられたのが「一週間の鎮守府清掃」。この日は中庭の落ち葉拾いをしていた。

ときおり曙の話が出る。以前はどうしても湿っぽい雰囲気になってしまっているので、あま

り話題にすることはなかったが、三人ともどこか憑き物が落ちたようだった。

「安否はともかく、提督のこと確認できて一応は満足できたんじゃないかな」

「それで成仏したと」

「……まあ、そんなところじゃない」

艦娘でも成仏って言うのかな、と朧は苦笑した。

「あつちで提督に会えたかな」

漣は天を見上げた。秋晴れの空。一筋の雲が流れていく。

「今頃ぎやーぎやーまくしたてるんじゃない」

「クソ提督?」

「クソ提督」

二人同時に吹き出して、けたけたと笑った。

ちやうどそのとき、場を離れていた潮と神通が戻ってきた。笑い合う朧たちを見て、

二人とも首をかしげる。

「どうしたの?」

「あ、いやなんでも……って、なにそれ?」

朧は振り返りつつ、潮の抱えているものを見て聞き返した。

「ゴミ袋取りに行ったんじゃないかったっけ」

「そうだったんだけど……間宮さんが」

潮が見せたのは袋いっぱいにつまったサツマイモ。

「落ち葉を集めてると言ったら、くださったんです。たくさん仕入れたらしくって」

落ち葉とサツマイモと言えばもはややることは一つ。

「焼き芋キタコレ！」

漣がホウキを握りしめた腕を高々と掲げた。

「あつちの広いところで焼きましょう。あ、ちゃんと許可をもらってるので、怒られる心配はないですよ」

そう言つて神通は小さく笑つて、手に持っていた大きなカゴを地面に置いた。

さつそく臙たちは集めた落ち葉をカゴに入れ、すこし離れたところの土がむき出しになつている場所まで移動する。

「曙ちゃんにも食べてもらいたいな」

抱えたサツマイモに目を落として、潮は言った。

「たくさんあるし、あとで持つて行こうよ。提督の分も一緒に」

臙があの高台を振り返りながら言うのと、潮は嬉しそうにうなずいた。

落ち葉と枯れ枝を一箇所に固めると、神通がマツチで手際よく火をつける。

乾いた枯葉はすぐにぱちぱちと音を立てて燃え始めた。

「お芋は濡らした新聞紙でくるんで、その上からアルミホイルを巻くといいそうです」
神通はサツマイモを一つ取り上げると、間宮さんに聞いたという焼き芋の作り方を説明した。当然、新聞紙とアルミホイルも、バケツと一緒に用意されている。

「潮、芋似合うね」

不意に漣が、ずつと大事そうにサツマイモを抱えている潮を見ながら言った。

「な、なんでですかそれ!?」

芋が似合うなどと言われて喜ぶはずもなく、潮は抗議の声を上げる。しかし、

「あー、なんとなくわかる」

「朧ちゃんまで!」

朧にも肯定されてしまい、潮は涙声で叫んだ。そんな潮の訴えにもかかわらず、くすくすという笑い声が聞こえてくる。

「もう、笑わないでください!」

「笑つてないけど……」

朧も漣も、すました顔をして潮を見ていた。

「え、じゃあこの声は……?」

三人が周囲を見回すまでもなく、笑い声の主は見つかった。

「くっ、ごめんさい、ふふっ、ごめ、くっくっ」

芋を持ったまま焚き火の前にうづくまつて、神通が必死に笑いをこらえていた。

「べ、べつに潮ちゃんに、ふふふつ、お芋が似合うとか、くふつ、思つてないですけど、ふつふふつ、ごめんなき、ふつ」

どうやらツボに入つたらしく、こらえようとすればするほど笑いがこみ上げてきてくるようだった。

見慣れない神通の姿に、潮たちは顔を見合わせ、そして、

「ふふつ」

「あはっ」

「はははっ」

笑った。

後日談

小さな秘密

艦娘が生活する寮の一階の片隅に、日用品や雑貨、お菓子などを取り扱う酒保がある。小さなスペースだが、艦娘の多種多様なリクエストに応えるため品揃えは豊富。それでも欲しいものがない場合は、ものにもよるが、注文すれば大抵は取り寄せてくれる。

この日、時雨は数日前に注文しておいたものを受け取りに酒保を訪れていた。「どうぞ、ご注文の品です」

店番の鹿島から差し出された一本の花。茎がたくさん枝分かれして、それぞれに小さな白い花を咲かせている。

「ありがとう」

「あの、大淀さんに言えば、経費で落とせるんじゃないかと思うんですけど。よろしいんですか、時雨さん持ちで」

「いいんだ。僕が個人的にやってることだから」

小さく笑って、時雨は花を受け取った。一本しかないのに、無数に開く花びらのおかげで小さな花束くらいに見える。

「なんなら艦隊のみんなで持ち回りとかでも」

「みんながそうしたいならそれでもいいけど、僕自身は止めないよ」

あくまで時雨自身が始めたことだから。他の艦娘もやりたいならやればいいだけのこと。もつとも、時雨がやっているせいで、他の子たちが遠慮しているのかもしれないという思いもある。それでも、始めてしまったからには、時雨はこれからも続けるつもりだった。

なおも引き留めようとする鹿島に別れを告げて、時雨は酒保を離れた。

片手にバケツ、もう一方に花を抱えて、時雨は玄関へと向かう。出口の手前で、外から入ってきた夕立とぼったり会った。

「あ、時雨、お花？」

「うん」

知らない人が聞いたら意味のわからない会話に聞こえるだろうが、二人の間ではこのすくない言葉のやりとりだけで十分伝わる。

「じゃあ夕立も一緒に行くっばい！」

外から来たばかりなのに、夕立は元気に言うとき雨の横に並んで回れ右をした。もし夕立にしつぽがあつたら全力で振っているだろうなと考えて、時雨は小さく笑った。

「ところで夕立、それどうしたの？」

夕立の姿を目にした時から気になっていた、彼女の手に握られた、サツマイモ。焼き立てなのかホカホカと湯気が上がっていた。

「ああ、そうそう、神通さんと潮たちが焚き火で焼いてたから、もらったっばい。みんなも呼んでこようと思つてたの！」

季節は秋。過ごしやすい陽気が続いている。焼き芋にぴったりの季節ではある。それにしてもなんで突然と、不思議に思つて焼き芋を見ていたら、夕立は勘違いしたらしく、

「時雨も食べるっばい？」

焼き芋を時雨の目の前に差し出してきた。皮が剥かれて色鮮やかな黄色を見せるサツマイモ。焼き芋特有の甘い香りが時雨の鼻腔をくすぐった。

一瞬、そのままかぶりつきたい衝動に襲われた時雨だったが、すぐに思い直して首を振った。

「僕はいいから、夕立が食べなよ」

「そう？　もし食べたくなったら、神通さんのところに行けばきつともらえるっばい。たくさんあるって言つてたから」

そう言つて、夕立は嬉しそうに焼き芋にかぶりついた。

花を持った駆逐艦と、芋を持った駆逐艦とが連れ立って艦娘寮の外に出る。変な組み

合わせだが、見ている人はいない。

頭上には清々しいほどに青い空が広がり、雲は小さなものが一つ浮かんでいるだけ。グラウンドの脇にある水道で水を汲んでから、二人は寮の裏手へと向かった。

途中、神通たちの姿が遠目に見えた。漣が白い煙を上げる落ち葉の山を棒でつついている。中にある焼き芋を掘り出しているのだろう。

——帰りに僕ももらおうかな。

そんなことを考えながら、時雨は歩を進めた。

しばらく敷石上を歩いていた二人だったが、途中で横に折れて、緑に覆われる丘の方へ進路を変えた。

道はないはずのだが、草の中地面がむき出しになった細いルートが一本伸びている。その先に、草木に覆われて見づらいものの、丘の上へと続く石段があった。

ひと二人横に並ぶにはちよつと狭い階段。時雨が先に登り始め、夕立が後に続いた。昼間なのに、木々に光が遮られて薄暗い。出来が良いとは言えない石段を踏み外さないように、時雨はゆっくりと、一段一段踏みしめて登っていく。いつも元気が有り余っている夕立も、この階段を登るときは静かだ。

長い階段を登りきると再び陽の光にさらされて、時雨は思わず薄暗さに慣れた目を細めた。

周囲を常緑の林に覆われる中、海に向かって小さな家が一軒建つくらしいの広さがぼつかりと拓けていて、そこからは鎮守府中のほぼ全域が見渡せる。

この小さな広場の片隅、高台の際の方に置かれた四角い黒っぽい石の前で、時雨と夕立は立ち止まった。

高さ五十センチもない直方体。この飾り気のない小さな墓石の目の前には花瓶が置かれ、薄桃色のコスモスが三輪差してあった。

「提督、また来たよ。今日は夕立も一緒だよ」

時雨はしゃがんで、墓石に話しかけるようにしながら、慣れた手つきで花瓶からコスモスを抜き取り、中の水を捨てた。そして、バケツから新しい水をすくって、コスモスと持ってきた新しいカスミソウとを一緒に生ける。このコスモスに時雨は見覚えがなかった。最近誰か他の艦娘が持ってきたのだろう。

もう一年、時雨はたまにこうしてこの場所を訪れて、花を供えている。すこしでも寂しくないように、けれど派手過ぎないように。墓守を買って出た、というほど立派なものではない。特にスケジュールは決めておらず、月に一、二度、思いついた時に花を注文して、取り替えに行くだけ。きつちり何日おきに、と決めてしまっていたら、気負い過ぎてかえって続かなかったかもしれない。

「これは夕立から提督さんに。はい、どーぞ」

そうやって夕立は手に握っていたなにかを花瓶の横に置いた。

「……夕立、提督はドングリは食べないと思うよ」

「やっぱり？」

舌をぺろつと出して、夕立はいたずらっぽく笑うと、置いたばかりの丸々とした二つのドングリを拾い上げた。たぶん階段を登ってくる途中に拾ったものだろう。

「これは雪風にあげよつと」

雪風もドングリは食べないだろう。すぐにそう思ったが、時雨は口には出さなかった。

「焼き芋は？」

「あ、もう食べちゃった」

言われて気づいたらしく、夕立はまた笑った。そして目を閉じ、手を合わせると、

「提督さん、焼き芋おいしかったっほい」

と、よくわからない報告をしていた。

時雨は一緒に持ってきていた雑巾を絞って、墓石を拭き始めた。最後に来たのはひと月ほど前だったはずだが、思ったほど汚れていなかった。きつと、花を持って来た誰かが掃除もしてくれたのだ。

「あれ？」

それでも一応丁寧に磨いていると、墓石の裏手に妙なものを見つけて、時雨は小さく声を上げた。

「どうしたの？」

夕立が顔を上げて覗き込む。時雨の人差し指がびんと伸びて、地面に向けられた。

「なんだろう、これ」

墓石の真裏、ぴつたりと寄り添うように、片手に収まるくらいの小さな白い石が置かれていた。ひと月前にはなかったものだ。

綺麗に切られた墓石と比べると、表面はかなりがたがたしていたが、ちゃんと四角にはなっている。自然の石とは思えない。

「誰かのお供え物？」

「石はお供えしないんじゃないかな……しかもわざわざ裏側に」

時雨は提督が石好きだったなんて話は知らないし、特に珍しい鉱石のようにも見えない。誰かのいたずら、という感じでもないし、そもそもここでいたずらしようなんて思う子はいないだろう。

花を持ってきた誰かが置いたというのが、一番可能性は高いかもしれない。でもなぜだろう。考えたところで答えは出るはずもなく、時雨はすこしでも手がかりがないかと、手を伸ばして石を拾い上げた。

ちやうど墓石と接していた面が目に入った瞬間、時雨は言葉を失った。

「なにかわかったっぼい？」

息をするのも忘れて、手にした石をじつと見つめていた時雨。背中越しの夕立の声に気がついて、慌てて振り向いた。

「あ、いや、なにも」

時雨は暴いてはいけない秘密を見てしまったかのような罪悪感を感じて、石を夕立からは見えないようにして答えた。

「でも、これはここに置いておこう」

そう言つて、石を元あつた場所に、元あつたように、慎重に戻した。これがなぜここにあるのか、わからないままだけれど、これはここになくてもはいけないものだ、わかつたから。

「そろそろ戻ろうか」

夕立は怪訝な顔をしていたが、これ以上踏み込まれないように、時雨は告げた。

「でも」

「僕も焼き芋が食べたくなってきたな」

ちやうどここから神通たちが小さく見える。まだ芋は残っているらしく、漣と臈が一緒になって掘り返していた。

「夕立も食べたい！」

なにか言いかけていた夕立だったが、焼き芋の話に食いついた。そんな夕立に、時雨は笑って言った。

「夕立はさつき食べたばかりじゃないか」

「おいしいから問題ないっほい！ ほら、はやく行こー！」

言うなり夕立は一足早く階段へ向かつて駆けていった。時雨もバケツを持って後を追う。

「また来るからね」

去り際、時雨は振り返ってつぶやく。提督と、そしてかつて共に戦ったであろう艦娘へ向けて。

ふと、時雨は自分の左手に目を向けた。陽の光を反射してきらめく銀の指輪がはめられている。なにか仰々しい正式名称があったはずだが、もっぱら「ケツコン指輪」と呼ばれるその指輪は、かつて提督と結んだ強い絆の証。

あの石に埋め込まれていたのは、確かにこれと同じ指輪だった。みな常に肌身離さず持ち歩いているはずのもの。だから、きつとあれは小さな小さな墓標なのだ。

誰のものなのかは知らない。でも、時雨も知っている誰かの。

「時雨ー？ はやくはやくー」

先に階段を降り始めていた夕立の呼ぶ声が聞こえた。

「今行くよ」

時雨はもう振り返らずに、夕立が待つ石段を急ぎ足で降りていった。

次来るときは、花をもう一輪追加で持ってこよう。そんなことを考えながら。